

バリ島西部ププアン村に伝承される大正琴を起源とする楽器マンドリン

Mandolin Instrument Originated with *Taisho-goto* in Pupuan Village, Western Bali.

梅田 英春

文化政策学部 芸術文化学科

Hideharu UMEDA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

大正琴は、1912年（大正元年）に、名古屋在住の森田吾郎（1874-1952）により創案、製作された鍵盤付弦楽器である。この楽器は、1915年頃から1940年頃まで、東アジア、南アジア、東南アジアへと広く輸出された。アジアに伝播した大正琴は、その後、それぞれの地域で変容をとげ、各地の音楽の中に取り込まれ、現在まで用いられている。本論文では、インドネシア、バリ島西部タバナン県ププアン村に伝播し、マンドリンとよばれる大正琴を起源とする楽器について概観する。

A *Taisho-goto* is a stringed zither, that is plucked using keys, and was invented in Nagoya in 1912 by Morita Goro (1874–1952). The musical instrument quickly gained popularity in Japan and, from approximately 1915 until 1940, it was exported to East Asia, South Asia and Southeast Asia. Some of the *Taisho-goto* that arrived in Southeast Asia, were remodeled according to local preferences and accepted as local instruments. The purpose of this research report is to describe the mandolin that originated with *Taisho-goto* in Pupuan village, Tabanan district, Bali, Indonesia.

はじめに

1912年（大正元年）に名古屋において森田吾郎によって創作された大正琴は、第一世界大戦によりヨーロッパから東南アジア、南アジア方面への輸出の止まった玩具に代わり、広くアジア諸国に当初は玩具として輸出されていた（梅田 2017: 58）。その後、各地では伝統音楽に合わせて改良が加えられ、独自の楽器へと変化していった。

本稿は、2018年8月から9月にかけてインドネシア、バリ島で行った日本から伝播した大正琴の調査の報告である。なお、今回、調査対象にしたのはバリ西部のタバナン県ププアン郡ププアン村に伝承する楽器、マンドリン mandolinとそのアンサンブルである。著者は2008年に同郡のプジュンガン村（ププアン村南部）で調査を行い、すでに調査報告としてまとめている（梅田 2010: 71-83, 田中・尾高・梅田 2012: 121-137）。しかし、その時の調査ではプジュンガン村の楽器、アンサンブル、演奏者からの調査しか行ってこなかったため、この楽器の歴史的な側面の記述は、「プジュンガン村における楽器の伝承民族誌」となってしまった。今回は、前回の調査報告に基づきつつ、新たなインタビューや楽器の改良の過程を踏まえ、バリ島西部で演奏されてきたマンドリンとよばれる大正琴を起源とする楽器についての調査報告をまとめた。

楽器の名称マンドリンとププアン村への伝承

マンドリンは、一般に17世紀頃にイタリアから広がっていったリュート型の撥弦楽器を指す。しかしバリ島の場合は、この西洋の楽器との関連については全く言及されない。また、ププアン村ではマンドリンとよばれる一方、南隣のプジュンガン村ではマノリン manolinと呼ばれているが、名称に差異はあるにせよ、マンドリンという楽器名からの転用だと考えていいたい。

大正琴が誕生してまもない時期の大正初期の大正琴の教則本には、大正琴にと西洋楽器マンドリンの類似点について次のように述べられている。

西洋楽器の「マンドリン」と日本楽器の「八雲琴」とを併合して、所謂西洋楽器と日本楽器の長所の折衷楽器らしく考えます、その故に日本音楽でも西洋音楽でも演奏仕易くなつて居るのであると思ひます。（渡邊 1916 : 頁数記載なし）

大正琴は其名の示す如く大正新時代に生れたる新楽器にしてマンドリンの八絃より六本を除き残りの二絃を以て演奏する…。（神長 1917: 頁数記載なし）

著者の考えではマンドリンの奏方〔ママ〕でやるのが一番上品で音楽的であると思ふ而して斯く演奏すべく作られた物と信ずる故に以下述ぶる所はマンドリンの奏方を引用し其れに著者の意見を加へたのである。（神長 1917: 頁数記載なし）

この三つの引用からわかることは、大正琴と西洋楽器マンドリンの音質と奏法の類似である。音質の点からいえば、スチール弦をピックで演奏する点であり、演奏法の点からいえば、トレモロ奏法を用いるという点が、両者の楽器に共通している。マンドリンは大正琴が創作される以前の1901年（明治34年）に日本に導入され、大正琴が創作された大正初期は各大学にアンサンブルが設立される時期と重なることから、このような言及がなされたと考えられる。

この楽器をマンドリンではなくマノリンとよぶプジュンガン村の演奏者への調査（2008年）においては、特に名称に関する伝承はなく、「マンドリン」という名称は間違っていることだけを強調された。一方、今回のププアン村の

調査においてマンドリンの名称の起源については大きく二つの説が伝えられていることがわかった¹。

一つはインドネシア語で中国標準語を意味するマンダリン mandalin から派生しているという説、もう一つは少林寺拳法の「少林」が訛って「マンドリン」になったという説である。重要なことは両説ともに「中国」との関わる起源が伝承されていることにある。2008年のプジュンガン村の調査においては「楽器は華人が売りに来て集落に広まった」とされており、それがこの楽器が中国から伝播されたものと考えられていた(梅田 2010: 72)。調査した当時、筆者は華人と日本人が取り違えられて伝承した可能性について言及したが、プブアン村でも同様な言説が楽器の伝播や起源として人々の間では信じられている。人によっては、華人が西ジャワから琴に類似したカチャピ kacapi とよばれる楽器を持ってきたことで、プブアンの発明家がこの楽器を作りだしたと考えている演奏者もいる。ここで重要なことはプブアン村がバリ中央部から隔絶された山間部に位置する一村落にありながらも、この地域には早くから華人が進出し、現在でもバリには珍しい仏教や道教の寺院があり、多くの華人系インドネシア人が商業経済を担っている点である(Aryasa 2017: 2-3)。当時、日本から輸出された大正琴は日本人の手で売られたのではなく、当時の商業経済を担う華人たちの手から各地の人々に渡っていった可能性が高く、華人からこの地域の人々の手に大正琴が渡ったと考えるのはプブアンの地域的特徴から考えれば当然ともいえる。ただ注目すべきは、この演奏と関わる村落の人々やこの楽器に関する現地の文献には、日本の大正琴との関係は一切言及されていないことである。

なお、今回調査したプブアン村では、プジュンガン村にマンドリンが伝承したのは1960年代だと伝えられている²。1960年代にプジュンガン村の人々がプブアン村にマンドリンの習得に訪れており、その結果、プジュンガン村に伝承されたという。なお、2000年代にプジュンガン村がこの楽器のアンサンブルの演奏を収録してバリのレーベルであるアネカレコードよりミュージックテープを販売したが、この収録は最初に学んだプブアン村の寺院において録音されたという。ただし、現在プジュンガン村ではマノリンの演奏はされなくなっている。

プブアン村で創作された楽器の形態

プブアン村の伝承では、マンドリンを製作した人物は農業に従事していたイクトツ・ラストラ I Ketut Lastra (呼称はパン・スカル Pang Sekar) であり、1930年代に華人³が村に伝えたオリジナルの楽器から類似した楽器を新たに作ったと考えられており、その楽器は、現在も孫に伝承されている。

バリ島ではバリ東部カラングッサム県と今回調査した西部タバナン県では大きくその形態が異なっている。大正琴

と同様にボタンを押さえて右手で弦を弾く奏法はかわらないが、東部の楽器が日本の大正琴のように長方形をしているのに対して、タバナン県の楽器は大きく、表面には彫刻が施されている豪華な楽器だった(写真1)。



写真1: 2008年に製作されたプジュンガン村の大正琴 (著者所蔵)



写真2: 1930年代にプブアン村で製作されたとされる大正琴



写真3: 1930年代に輸出用として製造された日本の大正琴 (著者所蔵)

これまでの調査ではプジュンガン村の楽器が村で変化したものか、あるいは村外から持ち込まれたものなのかが不明なままであった。しかし今回、調査でプブアン村で1930年代に創作された楽器を調査することができた。

写真2の楽器は、ラストラが1930年代に華人から伝えられたオリジナルの楽器をもとに創作した楽器と考えられているもので、現在はその孫が所蔵している。ボタンの部分は交換され50セン、25ルピアなど新しい貨幣が使われているが、かつては古いコインが使用されていたという。この楽器が1930年代に創られたかどうかの真偽はともかく、重要なことはこの楽器が、日本が戦前に輸出した大正琴と極めて類似している点にある。写真3は、1930年代に海外輸出用に製造された楽器である。当時、日本の大正琴には4弦、5弦のものもあったが、標準的な輸出用の大正琴は3弦であり(梅田 2017: 59)、絃の数は当時の本数と一致する。またプブアン村で作られたマンドリンは

¹ 2018年9月1日に行ったプブアン村在住の演奏者ウィアルタワン I Wayan Wiartawan へのインタビューに基づく。

² 2018年9月1日に行ったプブアン村在住の演奏者ウィアルタワンへのインタビューに基づく。ただし、文献によるとプジュンガン村ではそれ以前にもマノリンが演奏されており、1960年代以降に復興したと書かれている(Suriyatini, Sugiarta, Arnawa and Kustiya 1992: 20)。

³ 華人は北部バリのブレレンBuleleng県トゥムスクTemukus村の華人により伝承されたという記述もある(Sudirga 2015: 119)。

長方形であるが、日本の楽器と非常に類似していることがわかる。一方、バリの伝統音楽を演奏するためには全音階を必要としなかったことから、ボタンの数は12個に減っている。また1930年代の楽器のレプリカと2008年にプジュンガン村で製作された楽器はともに12個のボタンであることから、この地域のマンドリン、マノリンは楽器の形態に変化はあったもののボタンの数は維持されて、その音域を広げてこなかったことがわかる。今回の調査からは、1930年代に日本で作られた大正琴が何らかの手段によりプブアン村に運ばれ、そこで村人により類似した楽器が製作された後、その形が変化し大型化していったことが明らかになった。

プブアン村におけるマンドリンの復興

1930年代にプブアン村で創作されたマンドリンは、大人数のアンサンブル化をすることなく、マンドリン（2台から3台）、竹笛スリン suling、竹製口琴ゲンゴン gengongの三つの楽器だけのアンサンブルとして友人が集まる場などで演奏されていたという⁴。あくまでも娯楽のための音楽であり、儀礼的な役割は一切なかった。なお、1960年代にプジュンガン村に伝播したマンドリンは、ガムランの舞踊曲などを演奏するために写真4のように大型の吊ゴングを含む10人程度のアンサンブル化していった一方で、プブアン村では1991年には全く演奏されなくなってしまった⁵。



写真4 プジュンガン村のノリンのアンサンブル
(2008年12月著者撮影)

プブアン村においてこの楽器の復元を行ったのは、プブアン村出身の音楽家イ・マデ・ウィアルタワン I Made Wiartawanである。彼はこの復興について次のように述べている⁶。

プブアン村の若い世代は、皆、村の文化に魅力を感じることなく、街へ出ていくことを望んでいました。

そこで、思いついたのは子どもの頃、よく聞いていたマンドリンでした。しかし、そう思ったときはほとんど演奏できる人はいませんでした。もともとマンドリンは演奏グループとしての組織を持っていなかったため、その伝承システムはほとんどなく、学びたい人ができる人の家を個人的に訪れて習得するものだったのです。

この楽器の演奏を復興するためにはまずは楽器を製作しなくてはなりません。探しているうちに古い楽器が一台残っていることがわかり製作をはじめました。最初は、その楽器を分解するなどして構造を学び、2000年にまず楽器を製作しました。

このインタビューからわかるように1991年に演奏されなくなった楽器マンドリンは、その9年後の2010年、ウィアルタワンの個人的な努力により新たに製作された（写真5、6）。



写真5 ウィアルタワンにより2000年に製作されたマンドリン



写真6 ウィアルタワン製作の楽器によるプブアン村の伝統的なマンドリンの演奏姿勢

⁴ 2018年9月1日に行ったプブアン村在住の演奏者ウィアルタワンへのインタビューに基づく。

⁵ *Nusa Bali*, 27, Juli, 2016.

⁶ 2018年9月1日に行ったプブアン村在住の演奏者ウィアルタワンへのインタビューに基づく。

写真5, 6のように前面には彫刻された板が取り付けられているのと、ネックの部分にも彫刻が施されているが、楽器の構造は基本的には同じであり、写真2のププアン村に残されていた古い楽器と同様、ボタンの数は12個で、スレンドロ五音階が約1オクターブ半演奏できた。ただし弦は1弦増やして4弦とした。なお、ププアン村でのマンドリンの演奏姿勢は、写真6のように、演奏者は胡坐をかいて、ネックの部分の右足先に載せて傾けて演奏した。

楽器を数台製作したのち、ウィアルタワンは演奏グループの結成を試みる。以下はインタビューの内容である⁷。

ププアン村にはまだマンドリンの音楽を演奏できる年配者が何人かいたことから指導をお願いしたのですが、これまで大勢に教えた経験がなくうまく伝承することができませんでした。そこで楽器を製作した2000年に、まずは私が演奏者から曲を習得し、それを自分で次世代に教えることにしました。幸いに若い世代はこの楽器に興味を持つようになり、そうしているうちに、プジュンガン村とは異なる時代に合ったアンサンブルのグループを創設することを思いついたのです。2000年に5台のマンドリンを中心に構成したグループ「ブンシル・ガディン Bungsil Gading⁸」を創設しました。

2000年に創設されたブンシル・ガディンは、その後、村のさまざまなイベントで演奏することになる (Mawan dan Budiarsa 2014: 54)。更にマンドリンは電氣化されていく。成長したグループは、2013年のバリ芸術祭初日のパレードにタバナン県を代表する演奏グループとして参加し (Mawan dan Budiarsa 2014: 55)、また2016年6月26日にはバリ芸術祭のプログラムの一つとして参加した。この時、マンドリンの演奏者は胡坐をかく伝統的な演奏姿勢をとるのではなく、机の上に楽器を載せて、演奏者は椅子に座って演奏した (写真7)。

この芸術祭での演奏で注目すべきは、バリの伝統楽器以外の新しい楽器が多数加わっている点にある。(写真7, 8)。写真7では、エレキベース、写真8には、ジャンベ、ウィンドチャイム、タムタムのような創作楽器が加わる。これ以外にもギターなどが参加している。このようにウィアルタワンは、マンドリンのアンサンブルが現在の若者にも受け入れられるように伝統的な曲に加え、新しい作品を多く作曲し、これまでにないような響きを作りだした。一方、バリの舞踊曲の伴奏もすることで (写真9)、伝統的な作品から創作作品の両方が演奏可能であることを示した。

もう1点この舞台で注目すべきは、舞台装飾である。写真9, 10では舞台後方に赤い提灯が下がっているが、これは、マンドリンが中国起源であることを観客に示すために飾ったものであり、初めての舞台装飾だった。



写真7 2016年のバリ芸術祭で椅子に座って演奏するブンシル・ガディンのマンドリン奏者 (菊池和泉氏提供)



写真8 ジャンベ、ウィンドチャイムなどが加わる形態 (菊池和泉氏提供)



写真9 バリ舞踊スカル・ジャガットSekar Jagatの伴奏をするブンシル・ガディン (菊池和泉氏提供)

⁷ 2018年9月1日に行ったププアン村在住の演奏者ウィアルタワンへのインタビューに基づく。

⁸ ウィアルタワンによると、ブンシル bungsilは、椰子の実が大きくなる前の小さな塊の部分、ガディン gadingは黄色の椰子の実がなる品種をいう。まだ大きな実になりきらない生まれたての椰子の塊のようなグループという意味だという。



写真10 舞台後方にみえる赤い提灯（菊池和泉氏提供）

西洋音階のマンドリン創作と新しいグループ「ギター・バスカラ・エトニック Gita Bhaskara Etnik」の設立

楽器制作者であり、グループの指導者でもあったウィアルタワンは2016年6月にバリ芸術祭で演奏した後、マンドリンの音域を広げ、さらに西洋楽器とのアンサンブルの可能性を追求するために、西洋音階のマンドリンの製作にとりかかった。つまり、1930年代にインドネシアに伝播した輸出用に製作された西洋音楽の音階をもつ日本の大正琴に回帰していったのである。2017年に完成した楽器が写真11の改良型マンドリンである。この楽器は、最初に製作されたマンドリンと同様、白のボタン12個であるが、黒鍵に当たる音が出るように作られている。ただしボタンの並びは日本の大正琴のように整っていないわけではない。この楽器の開放弦はDであり、白ボタンは、左から、E、F#、G、A、B、C#、D、E、F#、G、A、Bとなり、ピアノの白鍵に当たるわけではなく、二長調の音階になっている。この理由は、開放弦をCに調弦すると弦が緩み演奏しづらいことによる。弦は4本ともギターの第2弦（直径0.11ミリ）を用いている。



写真11 2017年に製作された改良型マンドリン

2017年、ウィアルタワンは、最初に製作した楽器を用いたグループ「ブンシル・ガディン」を解散し、新たに改良型マンドリン3台含むグループ「ギター・バスカラ・エトニック Gita Bhaskara Etnik」を創立し、プブアン村で演奏されていたレパトリーに加え、西洋音楽の音階を使うことのできる改良型楽器の特徴を生かし、バリの人々

に愛されるポップな音楽の創作にとりかかり、プブアン村を中心に活動を始めた。その時、たまたまプブアン村を訪れていたポップ・バリ pop Bali⁹の男性歌手マニック Manik（本名はアナッ・アグン・ングラ・グデ・アルヤ・トゥナヤ Anak Agung Ngurah Gede Arya Tenaya）にその音楽の可能性を見出され、「ギター・バスカラ・エトニック」はマニックをマネージャーに迎え、グループの新曲《フルムーン Fullmoon》の本格的なミュージック・ビデオの制作を行った。制作費はすべてマニックが集め、2018年2月14日にプブアン村にてメディアを集めて記者発表を行い、記者の前で初めて《フルムーン》を演奏した（写真12）。ビデオのロケ地としてタバナンの王宮を借り、大勢のバリ舞踊などをともなった大がかりなものである。

なおこの作品から、プブアン村ではマンドリンを立てて演奏するスタイルに変更する。これらはすべてマネージャーのマニックの指示であり、ここから新しい音楽スタイルが確立していく。《フルムーン》はダイアトニックを用いる作品であり、ギター、ベース、ジャンベ、スリン、ウィンドチャイムなどが用いられ、洋楽とバリの音楽的要素を取り入れた作品となっている。このビデオはマニックにより、バリのローカルテレビ（Bali TV）のミュージック・クリップとしても数か月流れたことから、バリ全土にプブアン村の新しい音楽活動を伝えることになる。



写真12 2018年2月14日プブアン村での記者発表（ウィアルタワン氏提供）

「ギター・バスカラ・エトニック」は、5月29日に再び新曲《ラワール Lawar》のミュージック・ビデオをyoutubeに発表する。《フルムーン》は器楽曲として発表したが、この曲ではマニック自身がギターを演奏して歌っている作品であり、マンドリンのアンサンブルが、バリのポップ・ミュージックの伴奏の役割を担った。

その後、2018年8月にはプブアン村のあるタバナン県の芸術祭に参加するなど活発な活動を行っている。改良型マンドリン製作、彼らの創造的な音楽活動とマニックのプロデュースによって、マンドリンの音楽は、今や小さな山村であるプブアン村から、バリ全体に広がりを見せようと

⁹ バリ語で歌われるポップ・ミュージックの名称

している。

おわりに

戦前に日本から伝播した大正琴は、その詳細な経路は不明であるが、バリ西部の山岳地帯の山村であるププアン村に中華系の人々によって運ばれ、それをバリの人々が自身の音楽を演奏するために改良した楽器がマンドリンとして受容された。このマンドリンは、時代とともに盛衰を繰り返しながら、2017年には、日本で誕生した全音階を持つ洋楽器としての日本の大正琴の姿に回帰しようとしている。

この背景は、ポップ・バリの流行、地域のアイデンティティ表出などさまざまであるが、重要なことは、ププアン村の人々が大正琴についての知識がないことである。つまり日本の大正琴の類似品として現在のマンドリンを製作したのではなく、自らの音楽的欲求に基づいて、創作された点にある。楽器は何を演奏するか、というニーズに合わせて改良されていく。つまり現在のププアン村の若者たちが求めるのは、マンドリンを「洋楽器」として演奏することなのである。

付記

本稿は科学研究費「インドネシアにおける大正琴の受容と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表：梅田英春、基盤研究（C）、2018年～2021年）による調査、研究の一部である。

参考文献

- Aryana, I Gusti Made. 2017. Kuasa di Balik Harmoni: Ethnografi Kritis Relasi Etnis Tionghoa dan Etnis Bali di Desa Pupuan. *Jurnal Kajian Bali*, 7(1): 1-16.
- Mawan, I Gede dan I Wayan Budiarsa. 2014. *Revitalisasi Musik Mandolin di Desa Pupuan, Tabanan, sebagai Perkat Budaya Bangsa* (Laporan Peneritian Dosen Muda), Denpasar: Fakultas Seni Pertunjukan, Institut Seni Indonesia Denpasar.
- Sudirga, I Komang. 2015. *Laporan Penelitian Pemetaan Seni di Kabupaten Tabanan Bali*, Denpasar: Institut Seni Indonesia.
- Suryatini, Ni Ketut, I Gede Arya Sugiarta, I Made Arnawa and Dyah Kustiyati. 1992. *Study Deskriptif tentang Fungsi dan Bentuk Instrumen Mandolin di Desa Pujungan Kabupaten Tabanan*, Denpasar: Dilaksanakan atas Biaya Proyek Operasi dan Perawatan Fasilitas STSI Denpasar.
- 梅田英春 2010 「バリ島に伝承した大正琴——タバナン県プジュンガン村のノリン」『ムーサ』11: 71-83。
- 梅田英春 2011 「バリ島にもたらされた大正琴——カランガスム県アムラブラ周辺のフンティン」『ムーサ』12: 53-64。
- 神長瞭月編著 1917 『完全無缺 大正琴獨案内 第一集』東京：三盟舎書店。
- 渡邊迷波 1916 『大正琴之譜』大阪：榎本書房。
- 金子敦子 1995 『大正琴の世界』音楽之友社。
- 金子敦子編 2003 『大正琴図鑑』全音楽譜出版社。
- 田中多佳子・尾高暁子・梅田英春 2012 「大正琴の伝播と変容——台湾、インドネシアおよびインドに事例——」『京都教育大学紀要』120: 121-137。

新聞記事

- Sanggar Bungsil Gading Rekonstruksi Alat Musik Warisan Cina. *Fajar Bali*, 27, Juli, 2016.
- Rekonstruksi Mandolin Agar Tetap Eksis. *Nusa Bali*, 27, Juli, 2016.

Musik Mandolin, Alat Seni Musik Masa Penjajahan Jepang. *Bali Post*, 14, Feb, 2018.

Gita Bhaskara Etnik Hidupkan Kembali Mandolin. *Nusa Bali*, 16, Feb, 2018.

Official youtube video

Full Moon (2018年2月14日発表)

<https://www.youtube.com/watch?v=LpQUGIUHRfA>

Lawar (2018年5月29日発表)

<https://www.youtube.com/watch?v=4z8NyoUjHjs>

インタビュー

イ・マデ・グデ・ウィアルタワン | Made Gede Wiartawan
(2018年9月1日、ウィアルタワン宅)